



「きみの友だち」を読んで

松濤中学校 一年A組 中井 仁美

「わたしは『みんな』って嫌いだから。『みんな』が『みんな』でいるうちは、友だちじゃない、絶対に」私は恵美ちゃんのこの言葉に胸を打たれた。

『みんな』のもつ力はとても大きい。『みんな』の力を合わせれば難しいことを成し遂げたり、つらいことを乗りこえられる。でも逆に『みんな』が一人の心を傷つけ、人生までも変えてしまうことだって、ある。恵美ちゃんのクラスメイ卜の西村さんは、転校前の学校で『みんな』からいじめられ、心の傷は後遺症となって残り、性格が変わってしまった。堀田ちゃんは、『みんな』の仲を平和に保とうとしてはぶかれた。そして、恵美ちゃんは、『みんな』を信じなくなって、一人になった。恵美ちゃんは、「いなくなっても一生忘れない友だちが、一人、いればいい」と言う。たくさんの友だちと過ごすのではなく、あと何年生きるができるか分からない、たった一人の由香ちゃんという友だちと一生忘れない時間を過ごすことを選んだのだ。

もちろん、たくさんの友だちと楽しくワイワイと過ごすのも良いと思う。ただ、たった一人の友だちに精いっぱい友情をそそいで、恵美ちゃんと由香ちゃんのように二人だけの世界を築くということが本当の親友なのかもしれないとも感

じた。

恵美ちゃんの弟ブンちゃんは、クラスの人気者でいつも一番だったが、何でもできる転校生モトくんにみんなの注目が集まり、モトくんをついライバル視してしまう。そんな時に恵美ちゃんは言った、「いつかは誰かに負けるから」「いいじゃん、それで」と。人に負けるのは悔しい。でも、いつまでも勝ち続けているほうが、最初は楽しいが、つらくなるのではないかと思う。だから、その負けを認めてまた前を向くことも大切なのだと気付いた。

由香ちゃんは入院しているとき、『お友だちの部屋』の天井に昔描いてあった『もこもこ雲』を探していた。恵美ちゃんもそれに応えるように、想像の中の『もこもこ雲』に似たような雲を見つけては写真を撮ったり、スケッチをしたりして、入院中の由香ちゃんに見せに行っていた。しかし、由香ちゃんが亡くなった後、恵美ちゃんは『もこもこ雲』は由香ちゃんのように、優しくて要領が悪い子が天国に行くときにできるのだと気付く。強い日射しをさえぎって、自分と似たような子を見守るために。私は、この本を読んでから、よく空を見上げるようになった。そして、きれいな雲があると、思わず恵美ちゃんに教えてあげたくなってしまおう、『もこもこ雲』にお友だちができたよ」と。

今、中学生にはたくさんのお友だちがいる。一緒に笑って、話し合えるお友だちがいる。この本を読んで、お友だちには様々

な「かたち」があるのだと知った。そして、それでいいのだ、
ということも。これからも、私の友だち一人ひとりを大切に
して、一生忘れない思い出をつくりたい。



「西の魔女が死んだ」を読んで

広尾中学校 二年二組 中川 愛彩

皆さんは魔女がいると思いますか。

この物語は、中学に進んでまもなく、学校に行くことが嫌になってしまった「まい」を母が田舎のおばあちゃんのところへひと月余り預けたところから始まります。実はおばあちゃんは魔女で、まいはおばあちゃんから魔女の手ほどきを受けるのです。私は、この話に出てくるおばあちゃんの言葉からいろいろなことを学びました。

一つは、「何が幸せかは、その人によって違う」ことです。おばあちゃんが、

「人の注目を集めることは、その人を幸福にするでしょうか。」とまいに問いかける場面があります。それまでまいは、人に注目されるテレビスターになることは成功で、それは幸せとこののだと考えていました。しかし、おばあちゃんの言葉を聞き、毎日毎日人から注目されたり、騒がれたりしていたら大変かもしれない、と考えるようになりました。また、いじめられたり、無視されたりすることも注目されているということに気付いていました。

私も最初まいと同じ考えでしたが、テレビに出ている人には、私達には分からないその人達だけが分かる苦労や幸せなどがあるのだと分かりました。そして、人に注目されること必ずしもその人の幸せだとは言い切れないということも同時に学びました。自分が幸せだと感じることも、相手はどう感じるのかを考えなければいけないと考えました。

二つ目は「基礎トレーニングの大切さ」です。

ある日、まいはおばあちゃんに、

「超能力を使えるようになりたい。」

と言います。するとおばあちゃんは、

「超能力というのは精神世界の産物だから、まずは精神力をつけなければなりません。そのためには、精神の基礎トレーニングをする必要があります。」

と言いました。その基礎トレーニングとは、よく運動し、規則正しい生活をする、ということでした。私は、精神を鍛えるのになぜ必要なかと不思議に思いました。しかし、おばあちゃんは、

「何をするにも、いちばん大切なのは、意志の力。自分で決める力、自分で決めたことをやり遂げるです。」

という言葉でまいを納得させます。私もまたまいと同じく納得することができました。

確かに、どんなスポーツをするとしても、必ず基礎トレーニングをします。そしてそれは、上達し力をつけていくためにとても重要です。私は何事も、基礎トレーニングを大切にしようと思います。

三つ目は「直観に取りつかれない」ということです。

ある日、おばあちゃんの家のにわとりが殺されてしまいました。まいは殺した犯人が、道路の向かいの家にいる、まいの苦手な人が飼っている犬だと直観で考えます。その犬の毛がにわとり小屋の金網に付いていた毛と同じ色だったからです。しかしおばあちゃんは、

「直観に取りつかれてはなりません。そうすると、それはも

う激しい思い込み、妄想となつて、その人自身を支配してしまふのです。」

とまいに言います。私は、その言葉を聞き、「ちよっかん」とは「直感」と「直観」の二種類あることを初めて知りました。そして、まいのように本当かどうか分からないのに犯人だと直観で決めつけたり、見た目の様子などで好き嫌いを決めてしまふのは悪い直観だと思います。時々、私も悪い直観を信じてしまうことがあります。だからまずは、自分で考えたり、聴いたりして確かめようと思います。例えば、変わった見た目の食べ物も美味しくないと決めつけずに、まずは食べてみるなどです。

まいの考えは、私の考えとほとんど同じだったので、とても心に響きました。特に「直観に取りつかれない」というのは、自分で新たな視点を発見することができたので、とても良かったです。

一番印象に残っているのは、おばあちゃんが死んでしまい、母と一緒におばあちゃんの家に行った場面です。まいがおばあちゃんと別れる前にけんかした後悔を、おばあちゃんの魂にきちんと気持ちを伝えられたことで消すことができました。この場面で私は、まいとおばあちゃんの間を美しく思いました。後悔は絶対にしらないように普段から気を付けようと思えました。仮に後悔をしてしまったとしたら、乗り越えていくように努力しようと思います。

このように、この話から学んだたくさんのことは、今後の私を作っていくと思います。まいと同じように、私も「西の魔女」に弟子入りしたような気持ちになりました。



たった一つの言葉

鉢山中学校 三年A組 大熊 莉歩

「あなたの好きな言葉は何ですか。」そう聞かれた時、何と答えるだろうか。「ありがとう」や「思いやり」、「努力」。人によって、それぞれだろう。日本語には、美しい言葉がたくさんある。その一方、私達が知らない世界にも美しい言葉がある。では、それらの言葉を別の言語で表すことはできるのだろうか。

その答えを教えてくれるのがこの本だ。一つ一つの言葉には、その言葉特有の意味があり、別の言葉一語に表すことはできないのだ。日本語には日本語の美しさ、他の言語には他の言語の美しさがある。そのニュアンスをぴったり表す一語がある。

私がこの本に出会ったのは、もっと世界について知りたいと思っていた時だった。私は日本語と英語しか知らないから、他の言語について知りたいと思い、この本を手にとった。この本の題名を見て、まず最初に、「翻訳できない言葉」をどのように表しているのかが気になり、興味がわいた。

この本は、筆者のエラ・フランシス・サンダースが書いた本を日本語に訳した本だ。約五十語の言葉が書かれていて、一つ一つの言葉を絵と簡単な文で説明している。「翻訳できない言葉」をわかりやすく表している。イタリア語、スペイン語などの有名な言語から、タガログ語、ゲール語などあまり知られていない言語まで、色々な国の言葉を書いている。美しい情景を表す言葉、心情を表す言葉、そのシュチュエーションも様々だ。

私は、この本の魅力は筆者によるものだと思う。筆者はイラストレーターであり、様々な国に住んでいたことのある、世界をよく知る人だ。だからこそ、普通の人が知らないような素敵な言葉を記せたのだろう。筆者の描いた挿絵も筆者だからこそ、描けた絵である。その言葉を上手く表したイラストにより、もっと想像をかきたてる。

私が約五十語の言葉の中で印象に残った言葉は、ノルウェー語の「フォレルスケット」という言葉だ。これは、「語れないほど幸福な恋に落ちていて」と表されている、とてもロマンチックな言葉だ。この言葉は、日本語の「恋愛」では表しきれないことを表している。「語れないほど幸福な恋」というものは、そんな恋を経験した人にしかわからない、大人な言葉である。私は、そこにこの言葉の魅力を感じた。この一語は、日本語の他の一語では表せないのだ。

この本には、いくつかの日本語も書かれている。「木漏れ日」や「わびさび」など、日本人には当たり前前に思える言葉だ。けれど、これを言葉で表そうとすると、少し難しい。世界にとっても、自国語で表せないような美しい言葉とされている。外国人の筆者が、日本の言葉に魅力を感じ、この本を読む人に伝えてくれていることは、日本人として嬉しく思う。

この本の感動することは、言語が国の壁を越え、日本に伝わるということだ。そして、読んだ私達が、その言葉に魅力を感じることができるということだ。言い換えれば、文化の違う世界の国々を言語がつかないでくれるとも言える。そう考えると、様々な言語

があることは、良いことだと思える。そして、この本を読んだ人に影響をあたえられる「言葉」は素晴らしいものだと思う。

世界の国々の言葉は、日本語で表せないことを表せる。日本語も他の言語では表せないことを表せる。どの国の言葉にもそれぞれの国の良さがある。それが、この本が私に伝えてくれた一番のことであり、伝えたいことだろう。また、私達は、色々な表現を覚えることで、自分の気持ちを一番素直に伝えられるのだ。

しかし、今の私は、言いたいことをうまく表すことができていない。それは、自分が知っている言葉が少ないからだ。それで、自分の伝えたいことぴったりの言葉を見つけないことができない。だから、この本をきっかけに多くの言葉に出会い、語彙を増やしていきたい。

私は、この本を読んで、素敵な言葉に出会うことができた。それにより、うまく言葉に表せないことで、外国語で表すと、しつくりくるものもあるということに気づき、表現の幅が広がったと思う。また、世界についてもっと興味をもった。これからは、自分の気持ちに合う言葉選びをし、素敵な言葉を使っていきたい。

